平成十三年度読書感想文コンクール作品集

もさく

大分工業高等専門学校
学生図書委員会
教官図書委員会

目次

講評にかえて　一般科目　国語科教官　相本　正吾　2

入選　第一位　『海に消えた56人―海軍特攻隊―徳島白菊隊』を読んで　制御情報工学科　二年　平山　与子　3

入選　第二位　『蛍川』を読んで学ぶべきこと　電気工学科　三年　毛井　瑛広　4

入選　第三位　新たな考えと向きあう　土木工学科　一年　村上　栄俊　5

佳作　『小公子』を読んで　制御情報工学科　一年　檜垣明日香　6

〃　『バターはどこへ溶けた?』を読んで　制御情報工学科　二年　古賀ひとみ　7

〃　『ノルウェイの森』を読んで　制御情報工学科　二年　軸丸慎太郎　8

〃　『ベートーヴェンの生涯』を読んで　土木工学科　二年　池永　貴史　9

〃　『河童』を読んで　電気工学科　三年　磯村　直也　10

〃　『十二番目の天使』を読んで　制御情報工学科　三年　安部麻衣子　11

〃　『よその子』を読んで　土木工学科　三年　大野　道秀　12

編集後記　学生図書委員長（制御情報工学科　五年）　渡辺　純子

校内読書感想文コンクール（平成十三年度）

講評にかえて

一般科目　国語科教官　相本　正吾

本年度の読書感想文コンクールでは、国語教官によって選ばれた二十三作の秀作の中から、教官図書委員八名・学生図書委員五名計十三名による採点（ABCの三段階評価）を踏まえた国語教官の最終審査によって、別記の通り、上位入賞作品（第一位～第三位）及び佳作七作品が入選作となりました。

審査員十三名のうち九名からA評価、四名からB評価を受けて、みごと第一位に輝いた平山与子さんの『「海に消えた56人―海軍特攻隊―徳島白菊隊」を読んで』は、太平洋戦争でお国のためという名分で敵艦に体当たりして若い命を散らした特攻隊員のことを詳しく知って彼らの心中に思いをはせた平山さんの、人の命の尊厳と世界の平和を願う思いや考えが率直に打ち出されていて心打たれるものがありました。昨年夏の小泉首相の靖国神社参拝に対して、特攻隊員だった身内の死を思い、平和を祈願するという動機も首相にあったのではないかと平山さんが見ているところなど、小泉首相の登場で、日本の若者たちに政治や平和問題への関心が現れてきていることが感じられました。

第二位の毛井瑛広君の「『蛍川』を読んで学ぶべきこと」は、現代日本のストーリー・テラーの第一人者・宮本輝の芥川賞受賞作『蛍川』を読み、毛井君は、人の生死という問題に思いをひそめています。物語の最後に主人公がついに探し得て見た山中のホタルの大群の輝きを、死に別れた父及び友人との絆の現れと見、そして、かけがえのない生の愛しさ尊さ、いろんな人に支えられて生きていることの有難さを感じ取っている点など、秀逸です。なお、毛井君は、昨年度の第二位入賞に引き続いての同位入賞であり、文章のその達筆ぶりは、おなじみになっています。

第三位の村上栄俊君の『「新たな考えと向きあう」を読んで』は、海洋文学の名作『老人と海』を、釣った者（老人）と釣られた者（巨大なカジキマグロ）とのお互いの状況や心情のかけひきにまで深く思いやって読み味わった、ユニークな視点からの論になっています。小説を読むということは、読者は各登場人物の立場や思いに立って彼らと喜怒哀楽を共にしていくという貴重な実践をしていることなのであり、人や物に対する思いやりの精神を培っていく上で読書はかけがえのないものであることがわかります。

その他、毛井君と同じく、身近な人の死に見舞われた主人公の「生死」「再生」というテーマを考えた軸丸君の作品、二匹の猫と三匹の狐の寓語を読み社会の中で自分らしく生きることの実際を探っている古賀さんの作品、他人への思いやりや優しさが身についている作中の人物を通して人への気遣いということを考えた檜垣さんの作品、障害を持った人たちが長所を発揮してまわりの人に支えられ明るく精一杯生きていることへの理解を示した池永君・安部さん・大野君の作品、芥川龍之介の描いた河童たちの社会を人間社会と比較しながらそういった作品を書かざるを得なかった芥川の内面や最期の自殺の動機にまで考察を進めた磯村君の作品、の七つの佳作入賞作品も、文章力やテーマの掘り下げにおいて、上位三作品に決して引けをとらないものがありました。

読書は、その本に込められた貴重な情報や筆者の考えや思いを、読者が受けとめて自分なりに消化して、社会でよりよく生きていくための生きた知恵にしていく大切な活動なのであり、読書感想文コンクールに向けての今回の読書実践で読書の楽しみや意義をあらたに感じ取った学生は、今後も日常の読書を大事にしていってもらいたいと思います。

今回は、教官・学生の図書委員会の方で、四・五年生にも投稿を求めましたが、四・五年生の学生からは自主的投稿が無くて、入賞者は一～三年生の学生に集中しました。次回は四・五年生の積極的な投稿も期待します。

入選第一位

『海に消えた56人―海軍特攻隊―徳島白菊隊』を読んで

制御情報工学科　二年　平山与子

八月十五日、終戦記念日。毎年この時期になると、決まってテレビや新聞で取り上げられる『靖国神社参拝問題』。今年、内閣総理大臣の小泉純一郎首相は熟慮を重ねた結果、終戦記念日の十五日ではなく、十三日に靖国神社を訪れ、参拝した。この総理の参拝について賛否両論の意見が出され、今も議論が続いている。特に中国や韓国の人々はこれに猛反発し、日本の国旗を燃やしたりして抗議していた。

なぜ総理は厳しい批判もある中で参拝を決意したのか。あるニュース番組では、「小泉総理の身内に特攻隊として戦死された方がいるので、総理は戦争で亡くなった人々に対して強い思いを抱くようになり、今回の参拝に及んだのではないか。」といった解説をしていた。

『特攻隊』。これがどんな攻撃手段で、どんなに悲惨なものであったかは、だいたい知っている。敵艦に自らの体ごと体当たりするのだ、想像してみるだけでも恐ろしい。

その特攻隊として飛行機に搭乗する事を命じられたのは、飛行予備学生や学徒兵、少年兵などといった青年達であったらしい。

特攻隊には、国のために一生をかけた大人の軍人達が選ばれたのだろう、と思い込んでいた私にとって、この事実は大きなショックとなった。お国のためと言われ、行きの分の燃料しか積まれず、五百キロの爆弾を抱えて飛び立つ青年達の気持ちは、どのようなものであったのだろうか。この時期は様々な事に興味を持ち、将来への希望でいっぱいな時だと思う。戦時中ならば特にその思いは強いだろう。それなのに、もう『死』へ急がなければならないのは、あまりにもひどすぎる。私はショックと共に、怒りと深い悲しみを覚えた。

今回読んだ本は更に、「彼らは消耗品とされていた」という事を教えてくれた。『消耗品』という言葉だけは、私達人間、あるいは全ての生き物に使ってはならない言葉だと私は思った。青年達を消耗品として出撃させた大人達の考えが私には分からない。命は自分のものであって、国のため、戦争のために簡単に使い捨てられるものではないと思うからだ。きっと、その大人達の中にも、自分の息子と同じくらいの青年を死に送る事に心を痛めた人がいるだろう。これは仕方のなかった事なのだろうか。軍国主義の国、当時の日本には命を消耗品扱いする政治を考え直す余裕はなかったのだろうか。私は心が痛い。

しかし現在でも、命を消耗品だと思い込んでいる人がいない訳ではない。いや、かなり多くの人が命を軽く見ていると思う。「やってみたかった」と言う偏った好奇心で人を傷付けたり、ちょっとした落胆で自分を死へ追いやったり、自分の思い通りに行かない相手を襲ったり、今はそんな話を毎日のように聞く。そしてそんな事件はよくある事だと思うようになってしまった私がいる。多分、私だけでなくほとんどの人がそう思い始めているのではないだろうか。だからそういった事件が相次ぐのだと思う。

けれどもこの考えが、決して当たり前になってはいけない。多くの人がこんな考えになってしまうと、更に命を軽視した事件が起き、ついには戦争がまた起こるかもしれないからだ。私は死ぬのが怖くてたまらない。それ以前に、国のため、戦争のためなんかに死にたくはない。私の命は私のもので、自分のために使いたいし、ましてや『消耗品』とされるなんて絶対に嫌だ。

敵艦に向かって飛び立った彼らは、私のように、自分の命は自分のために使いたい、と思っていたのだろうか。それとも当時の、「命を消耗品扱いする政治」に洗脳されて自分の命など惜しくない、と思っていたのだろうか。私は前者であったことを願いたいが、どちらにしろ、もう二度とこのような悲しい出来事は起こってほしくないと思う。そして、当時の彼らが心の奥で何を思っていたのかを、

残念ながら知る事のできなかった私は、せめて彼らがこの世に存在して、勇敢に戦い、何よりその命が決して消耗品ではなかった事を主張したい。

小泉総理も、特攻隊だった身内の死を通して戦争の悲しさや人の命の重さを実感し、平和を祈るためのみに靖国神社を参拝したのだと思う。靖国問題をはじめ、国と国との問題や人の命に関わる問題など、これからも議論は続くだろうが、とにかく私は将来の平和を切望しているのだ。

入選第二位

『蛍川』を読んで学ぶべきこと

電気工学科　三年　毛井瑛広

この物語を読み終えて、最初に感じたことは、この小説がひとつの「芸術作品」のように思えるほど描写が緻密で繊細である、という点です。自分が読んでいて、その情景が頭の中でどんどん浮かんでくるような感じです。物語の展開も読者が飽きることがないように、現実と過去の思い出とをシンクロさせて、穏やかな内容ではあるが、スピード感もあり、あっという間に全編を読み上げることができます。

さて、この「蛍川」という物語は、昭和の北陸富山を舞台に、初恋、父の死、友人の事故などを通して、「生きる」ことのすばらしさや苦しみなどを少しずつ学び、成長していくひとりの少年の姿を中心に描いています。

昨年、僕は森鷗外の「高瀬舟」を題材にして「死」というものをテーマに感想文を書きましたが、今年もどうやら「蛍川」からまたしても「死」について考えていくことになりそうです。

「死」は人間なら必ず誰にでも訪れます。それは自分だけではなく、自分の周りにいる人たちも例外なく全員に来る運命であり、避けられません。しかし、その時がいつ自分に訪れてくるかは、誰も知ることはできません。もしかすると明日にでも「死」が訪れるかもしれないのです。そんな中で、この物語の主人公である少年は唐突に二つの「死」を目の前にします。

一つ目は、戦後の復興時に北陸で有数の商人にまでのし上がった過去がある少年の父の死です。少年の父は年老いてはいるが少年にとっては父として、そして男として尊敬していたのだろうと思います。だからこそ、他人には話せないような内容の話でも、つつみ隠さず父には話せるのだと思います。そしてこれから少年にとってはまだまだ必要な存在であったのだ、と思います。しかしその父が脳溢血で倒れます。しだいに不自由になっていく父は少年に精一杯の愛情を持って自分の過去を話します。この父の愛を少年はどう受けとめたのでしょうか。――人を愛する気持ちは誰にでもあるけどその対象はそれぞれ違う。父は息子のために、前妻と忘れたこと、借金に追われて苦しい生活も自分のために耐えてきたことを語り、そして父は息子に自分の夢を託して死ぬ。自分が一度も見ることのできなかった蛍の大群を見る、という夢を――。

二つ目は初恋相手のライバルだった友人の死。お互いのライバル同士でも、一番よく互いに相手の気持ちをわかっていました。そんな友人が突然の事故で死んでしまう。形見になってしまった友人からもらった初恋相手の写真を見て、彼はどう思ったのでしょうか。僕はこう思う。一生の友人になるはずだった彼のためにも自分は精一杯生きて、彼女を必ず幸せにする、と思ったのだろうと思います。

そして、少年は彼女を連れて父の夢見た蛍の大群を探しに行きます。歩いても歩いても見つからない蛍。それでも少年は父のために、友人のために、蛍を探し続けます。そして、少年たちはまばゆいばかりに輝く蛍光を見つけます。何千、何万もの蛍が輝き、やがて消えていく。その様子を見て少年は何を思ったのでしょうか。僕だったらこう思うでしょう。いま自分の目の前で幾千の小さな蛍の命が消えていっている。でも最期の時が一番美しい輝きを放つ。その貴重な輝きが目の前に無数にある。これに比べれば人の命なんて、どれほどにちっぽけなものか――。

蛍の一生は短いけれど美しい。では我々人間はこの八十年の一生で何をすることができるのか?その答えは人それぞれだと思います。僕はこう思っています。「人が生きるということは、人を愛すること。」人それぞれ愛する対象は違っても愛していることに変わりはない。そして僕らが生きていることは、つまり誰かに愛されているからなのだと思います。

きっとこの物語の主人公である少年が見た人間の形の蛍の綾なす妖光は、彼の父親なのだろう、と思います。父親が見ることができなかった蛍の大群を息子に見せてあげようと、父親は蛍に化けたのだと思います。それは、人間の生死を越えた美しい命の輝きなのだ、と思います。

最期に、この物語で僕が学んだことは、生きているということのすばらしさ、そしてそれは多くの人たちに支えられているということです。一日一日を無駄に過ごさず、毎日を精一杯生きていこうと思います。

入選第三位

新たな考えと向き合う

土木工学科一年　村上栄俊

今回、この「老人と海」を読んでみようと思ったきっかけは意外なものだった。読書感想文の材料を探すため本屋を覗いたとき、数多くある本の中から偶然この本を見つけた。書くのは小説だと決めていた私にとって、これはピッタリの本だった。ヘミングウェイは「武器よさらば」などの本を書いていて名前は知っていたが実際、読んでみるのは初めてだった。これはいい機会だと思い、楽しみな気持ちで読み始めたが私はこの本の内容に圧倒された。

ある町で年老いた漁師のサンチャゴが不漁にもかかわらず小さな舟に乗り、四日もかけて見るも巨大なカジキマグロを釣りあげた。そして、帰る途中に多くのサメに襲われカジキマグロを食われ、頭だけを持って帰ってくるという話だった。そこには老人とカジキマグロの想像を絶する戦いがあった。しかし、その反面、老人のカジキマグロに対しての思いがものすごく強かった。その様子が鮮明に書かれていて、とても興味が湧いた。

私も魚釣りを一度や二度、いや数十回したことがあるが、私は魚を釣ることの楽しみしか考えていなかった。ただ糸を垂らして魚が食いついたら竿を上げ、そうやって釣れた時、魚釣りの楽しみを味わっていた。ところが、この本の中に出てくるサンチャゴは釣れたときの楽しみもあったが、それ以上に獲物がエサに食いついた瞬間、魚と網を使って格闘している瞬間を楽しんでいた。そんな考え方もあったとはまったく思ってなかった。魚釣りに対しての私の考え方が少しずつ変化していったのだ。そう考えてみると、釣る人間と釣られる魚の心情が気になって仕方なかった。人間としては魚を釣って楽しみたい。しかし魚としてはエサの誘惑に負けず釣られまいと思っている。この人間と魚のかけひきがおもしろくなってきた。今までは魚を釣る人間の立場しか考えてなかった。この本に触れて、人間に釣られる魚の立場を考え始めた。

釣られる魚の立場はひどく空しいと私は思う。釣られる魚にも人間と同じように様々な事情を抱えた魚がいるという考えも浮かんできた。例えば、生まれてまもない小魚や若く〝旬〟を迎えた魚、あるいは寿命を迎えた年老いた魚がいると思う。その他にも傷を負った魚やみんなのリーダーとなっている魚、家族や友達もいない孤独な魚達がいてもおかしくはないと思う。そんな魚達が釣りを楽しみとしている人間達の餌食になるのは、なんとも悲しげな感じがする。それと同時にどうしようもできないやるせなさが私を襲ってきた。

趣味として魚釣りをしている人達もいれば、漁師のように生活がかかっている人達もいる。サンチャゴは後者の方でこの「老人と海」に出てきたのは巨大なカジキマグロだった。そのカジキマグロはとても大きく偉大だった。老人と四日間にもわたる死闘をくり広げた。そんなカジキマグロはみんなのリーダーとして慕われていたのかどうかということは、この本を読んだ限りでは分からなかった。そし

て、ここで私は深く考えてみた。この魚がかかる前、サンチャゴは八十六日間の不漁に悩んでいた。八十七日目に巨大なカジキマグロがかかったのだった。八十七日間もあきらめなかったのはとても凄いと思うが、この巨大で頭がいい魚は何十日もサンチャゴのことを見ていたのだと思う。そしてこの魚は孤独だったんだという考えが膨んだ。そんな魚のことをサンチャゴは認めていたのだ。闘っている最中も勇敢なヤツだと思っていた。ここで言う〝やつ〟というのは、このカジキマグロを魚としてではなく人間として考えていると思う。サンチャゴが四日間の死闘に勝ち、舟の横にくくりつけて町へ戻っているときも兄弟のように思っていて、絶えず言葉を投げかけていた。そして、帰る途中に多くのサメに襲われたとき、私は胸をえぐられるような思いがした。とても悲しくて、涙が出そうになった。このときのサンチャゴの心情は分かっているようで分かっていないと自分では思っている。本だからいろんな視点から物語を考えられるからだ。

　この本は、私に貴重な考え方を教えてくれたと思う。私が思うに、サンチャゴの心情は以下のようだと思う…サンチャゴは釣っているときは、とても楽しく思っていた。四日間、魚のことを目の敵のようにしていた。しかし、最後に兄弟のように思っていたカジキマグロがサメに襲われた。体がボロボロになりながらも、サンチャゴはサメからカジキマグロを守ろうとした。サンチャゴはとても悔しかった。こんなことになるのなら、最初から釣らないほうがよかった。淋しくて、切なくてサンチャゴはたまらなかった…こういうことを考えてみるのは生まれて初めての体験だった。これから私は新たな考えと向きあいたい。そして、私の身の周りでこんなすばらしい体験ができると信じている。

佳作

『小公子』を読んで

制御情報工学科　一年　檜垣　明日香

　この物語を読み終えて、わたしはまずとても優しく人への思いやりにあふれた文章だと思いました。

　主人公の小公子セドリックは素直で人への信頼を忘れず金銭などへの執着は持たない子供で、そんなセドリックの周りを取り巻く身近な大人達もセドリックに親しみを持ち思いあっています。こんなセドリックと周囲との関係に、わたしは多かれ少なかれ憧憬を抱かずにはいられません。

　なぜなら、最近の人間は他人への優しさと思いやりに欠けている感が拭えず、自分勝手な人間が増えているような気がしてならないからです。例えば、タバコの吸い殻や空き缶を道端に捨てる人、電車などの公共の乗り物に乗っている時に携帯などで大声を出して話す人、駐車禁止の場所に駐車する人、並んでいる列に割り込みをしてくる人、平気で他人の気持ちを考えず傷つけるような言葉を言う人――挙げたらキリがありませんが、まさに自分さえ良ければいいという考え方の人がとても増しているように思われます。

　もちろん、自分だってその例外では無いでしょう。自分でも気づかない内に、あるいは気づいていながら思いやりに欠けた言動をした覚えが何度もあります。

　物語の中で、セドリックは話の最初の方でアメリカにいる間に、伯爵から好きに使って良いと言われたお金を、迷わず貧しい人や困っている人の為に使っていました。こんな行為から、セドリックの裏表の無い、見返りを求めない優しさは、すごいと胸を打たれずにはいられません。

　更にセドリックの言動の端々には何度も母親を心配する心情が現れていて、なんだか心が温まる思いがしたものです。まだ幼い子供だから、ということもあるでしょう。が、近年、それは人間が忘れかけている大切なもののひとつではないのかと思うのです。

　近頃ニュースなどでしょっちゅうわたしと同じ年頃ぐらいの人間が父親を殺しただとか、あるいは逆に父親母親が子供を虐待のあげく殺しただとか、そんな事件が報道されていま

す。血の繋がった肉親、家族にどうしてそんなことが出来るのかと疑問と困惑を覚えるばかりです。

彼らがあと少し、他人のことを考える思慮深さがあったなら――と思わずにはいられないのです。

人は、自分という存在の為だけに何かを求めるあまり、他人への思いやりと優しさを忘れてしまったのではないでしょうか。

お金と地位目当てに嘘をつき、セドリックをおとしいれようとした女性との話が、作中で登場します。彼女は自分の息子が伯爵なのだと言い張り、しかもそれは息子の為でもなく自分の為に、でした。あまりに欲深い人間はみっともないものだ、としみじみわたしは考えたものです。まるで自分が物語の中の人物のように、彼女の偽りが暴かれた時は胸がすく思いでした。

わたしは、この話はとても感動できる話だなと思います。この話は主人公セドリックだけでなく、セドリックの母親のエロル夫人もまた、とても素晴らしい人でした。主人公セドリックの祖父にあたる伯爵は、セドリックの影響を受けてか段々とゆっくり他人への優しさを思い出していきました。人間としての感情を取り戻していきました。

わたしも他人への思いやりを、優しさを出来る限り忘れないようにして、また他の誰かが他の誰かに優しくなれたら良いと思います。人は自分が優しくされた分だけ、他人に優しくなれないわけではない、とわたしはこの話を読んで思いました。

無論、物語の中のように、現実に自分を取り巻く周りの人々が、たとえ自分が優しく思いやりのある行動を取っても、必ずしもそればかりを返してくれるわけではないでしょう。

しかしわたしは、例え自分が傷つけられたからといって、苦しめられたからといって、少しでも正しいと思える考え方、行動をしたいです。簡単に、あたり前のように他人を傷つけないようにしたいです。

この話は、人が忘れてきている大切な何かを、思い出させてくれる話だな、と思いました。

佳作

『バターはどこへ溶けた？』を読んで

制御情報工学科　二年
古賀　ひとみ

「確かな物など無い　心から楽しめ　移りゆく物事の素晴らしさを知れ　足を止めてしっかり自分を見つめよ　自分らしくあれ　清貧の志を持て　ありふれた幸せに気付け」

この言葉は、物語中に出てくるタマと言う猫が、欲望に目がくらみ自分が何なのか分からなくなっていた同じ猫のミケに、言った格言です。私はこの本を読み感銘を受けた言葉は沢山ありましたが、この言葉が何よりも心に残りました。時代や周りの環境、関係に流されてばかりで、足を止め自分を見つめ、自分らしくある事などあまり無い私にとって色々考えさせられました。自分らしくしていると思っていても、ふと違う第三者の立場に立ち、自分を見つめてみると周りに合わせる事ばかり考え、害の無い言葉を選ぶ自分がいます。しかし、この本の影響を受けたからと言って今までの自分の全てを否定し、「さあ、新しい自分を探そう。」とは思いません。合わせ過ぎや考え過ぎは自分を押さえ込む事になるかもしれませんが、少しの協調は必要だと思っているからです。格言の最後に「ありふれた幸せに気付け」とあります。私を含め、この事に気付いていない人が多いのではないでしょうか？人間は、ある欲望を果たすと、またそれを越える欲望を求めるようになります。どんどん欲望はふくらんでいくのです。果たせない欲望も果たせるものだと思い込んでしまいます。少しでもそれが果たせないとなると、「自分は不幸なんだ。」とか「ついていない。」とか考えてしまいます。それが果たせて得られる幸せは人生の＋α（プラスアルファ）。何かを求める時、人は「無いよりもある方がいい。」と当たり前のようにそう思ってしまいます。自分に与えられた運命よりも目の前の富に目を奪われ、自らの自分らしさよりも背伸びし

た架空の自分を思い描き、そして羨むのです。悲しい事に好奇心が形を変え、ただの欲望になってしまっているのかもしれません。この本の中では、そう思い込み求め続けた二匹の狐がそんな欲望に自らを無くし押しつぶされ、たった一度の自分達の人生を駄目にしてしまいました。一方の猫は、「無くても幸せ、あればもっと幸せ。」それをモットーにしていた事で、平凡だけれど心は満ち足りた生活を送る事が出来ました。

私は今まで、どちらかと言うと猫よりも狐的な生活を送ってきました。目標を持ち、ただそれに向かって突き進む、それによって無くす物がもしかしたらあるのかもしれないけれど、その目標を果たす為なら仕方無い事なのかもしれないと思ってがむしゃらに頑張ってきました。しかし、今回この本を読み、それだけでは無いのだと言う事を知りました。その位の意思を持ち、物事を進めていく事で見失ってしまう自分の一面も大切なのではないだろうかと思えるようになりました。ずっと猫のような考えでいると言うのは、少し難しい事だとは思いますが、自分に余裕が出来た時、あるいはまた、自分に自信が持てず行き詰まってしまった時など、猫になってみるのもいいかもしれません。そうなってしまう前の自分の欠点や良さが見えてくるのではないでしょうか？無我夢中に毎日を一生懸命に生きれば生きて行く程、ただでさえ見えにくい、分かりにくい自分、自分らしさを見分けられなくなってしまう気がしてしまいます。そして、自分の周りに対しても同じように分からなくなってしまう気がしてなりません。自分では何も手を抜いているつもりは無いのに全く理解しにくい現実です。これに気付いたら、私は猫になります。同じ境遇に立つ人がもし近くに居たならば、猫になってみる事を間違いなく勧めるでしょう。猫になって本当の自分にたち返ってみて、手の平や、足元にある小さな幸せ達に気が付く事が出来る大人に私はなりたいです。「向上の精神」と「清貧の志」を合わせ持つ。贅沢でそして大変な事ではありますが、これをモットーに、自分に無理をせずマイペースで自分の道を進んで行こうと思います。たどり着く場所が同じなら、道端の小さな花の命に思わず微笑みながら一歩一歩歩んで行く、そんな生き方を私は選びたいです。たった一度だけ与えられたこの瞬間、今私はそれを明日の糧とし、自分らしくいようと思います。この本に出会えて良かったです。

佳作

『ノルウェイの森』を読んで

制御情報工学科　二年
軸　丸　慎太郎

僕は村上春樹さんの書かれた小説が好きで、彼の多くの作品を読んだ。その中でも「ノルウェイの森」が一番好きだ。

主人公が十八歳の大学生で、年齢が近かったせいもあるかも知れないが、僕が、あるいは僕らが抱いている想いや感情を、やはり主人公も抱えていて、すごく共感できたし、感動することができた。

物語は「生」や「死」、「再生」をテーマにして書かれており、その多くの部分はすごく激しく、印象的であり、時に繊細で、感動的だった。「死」は決して、「生」の反対に位置するのではなく、「生」の一部なのだ、という言葉が特に印象深かった。必ずどこかにあるものなのに、普段意識することのない「死」を、とても身近に感じ不思議な気分になった。

僕にとって「死」は、怖いことであり、暗いことであり、嫌な事だった。自分の祖父や友人の「死」がそうであったように。そして、僕は今のところ「生」の側におり、対岸に位置する「死」には「生」の側にいるかぎり据えられることはないと思っていた。これは僕にとって至極まともで、筋が通っているように思えた。僕はこちら側に立っていて、あちら側にはいない。しかし、先程の考え方によれば、僕は「生」の側にいる事でもう既に「死」に据えられている、という事になる。生きていることで僕らは、同時に「死」を育んでいることになる。

そのことで僕は「生」及び「死」に対しての価値観が大きく変わったように思う。遠く

それもはるか遠くにあると今まで考えていた「死」は、既に僕の後ろに立っていたからだ。しかし、その変化は感覚的なもので、口に出したり文章にすることは僕にとってすごく難しい。もしそうしたとしても、口に出した途端に違うものになってしまうように思う。あるいは、僕がまだ人間的に成熟していない子どもだからそうなのかも知れない。僕はその変化を、言ってみれば空気のようなものから感じ取ったのだ。

しかし僕はその変化によって悲観的になってしまった訳ではない。むしろ前向きな気持ちになれたと思う。物語のラスト・シーンで主人公が、「他人が僕らをどう見ようと、僕は気にならなかった。僕らは生きていたし、これから生きつづけることだけを考えなければならないのだ。」と、これから痛みを感じつつ生きていくことを決意し、親友や、恋人の死から前向きに立ち直ろうとするところがある。僕はこのシーンと、主人公の言葉がすごく好きだ。この言葉の中に「生」と「死」と「再生」というテーマが集約されていて、「生」の持ちうる「勇気」や「力」、死の持ちうる「哀愁」や「悲哀」などの哀歓を感じることができるからだ。

大切なのは、「死」に据えられることで恐怖してしまいちぢこまり、「死」に理不尽に振り回されてしまわないことだと僕は思う。「死」に据えられることで少しずつでも必死に何かを学び取り、「死」と向きあって生きる姿勢のようなものを確立し、そこで学び、そしてより強くなることだと思う。

生きつづけることを決意した主人公に、レイコさんという女性が「幸せになりなさい。」とだけ忠告する。

僕は真に重要なことはこの言葉にあると思う。「幸せになりなさい。」「生」と「死」に、「幸せ」はどう結びつくのだろう。僕には「幸せ」の意味さえよくわからない。

しかし僕は、彼女は生きていく意味のようなものを主人公に伝えたかったのではないかと思う。必死に何かを学びとることも、強くなることも、全ては「幸せ」になりたいがためのことなのだということを。きっとそうだろう。僕はそう思いたい。結局のところ、一体何が「幸せ」で、何を学べば「幸せ」になれるのかなんて事は、きっと誰にもわからないだろう。僕は僕でこの受け取りかたが正しいのかわからない。

主人公は三十七歳になり、昔、つまり十八歳の頃を思い出す。僕も「生」や「死」にかこまれつついつか必ず大人になる。そうしたら僕も昔を思い出すだろう。僕はその時、幸せになっているだろうか。そのことは誰にもわからないだろう。でも僕は生きているし、これからまた色々なことを学ばねばならない。そのために僕は、これからも生きつづけることだけを考えていこうと思う。

佳作

『ベートーヴェンの生涯』を読んで

土木工学科　二年　池永貴史

「ベートーヴェン」といえば、よく音楽室にある肖像画を思い浮かべる。そしてあの、交響曲第五番ハ短調「運命」を。鬼のような形相とボサボサの髪。それだけで他の音楽家とは隔たりを感じさせる。そんな彼にあれほどの魅力を感じるのはなぜだろう。そして、あの素晴らしい作曲の数々はどのようにして生まれたのだろう。

彼が聴覚を冒されながらも作曲を続けたことはよく知られている。この障害は一生彼につきまとい、彼を不幸にする。しかし、彼はこのことで、一生涯ずっと不幸のままだったのだろうか。いや、私はそうは思わない。彼が一生不幸のままでいたのならば、あれほど輝かしい光を放つ、大きな人物にはなりえなかったと思うから。確かに、彼は聴覚を失うことで、人々と話すことができず、あらゆる社会との交流を避けていた。病弱で、時には死をも考えた。実際彼はこう言っている。

「死ぬことを知らない人間は実にあわれだ。私は十五歳でもうそれを知っていた。」これは、

彼の人生がはじめから悲しく冷酷なものとして示されたことを意味する。

けれども、彼はこのような境遇に圧倒されたままではなかった。絶えず恋をし、回復の日を、たった一日でもよいからとそれを望んだ。彼は一時でも強くあろうとしたのだ。そしてその姿勢は、私の模範となりうるものであり、尊敬すべき生き方である。彼の生き様を見ていると自分まで強くあらねばならないと思えてくる。それどころか、ささいなことで自分をかわいそうに思う私を情けなく思った。

彼の強靭な精神は、何度も挫折しそうになりながらも、しっかりとそれに耐えた。そればかりか、彼の悲しかった時代に彼の魂は洗練され、さらにたくましくなった。もし彼が苦悩に負け、「諦め」に自分の避難所を求めたならば、私は彼に何の魅力も感じなかっただろう。

ところで、彼には、彼のこの上ない善良さを知る親しい人々がいた。恋愛の対象であったり、友人であったり。今でこそ、一人の音楽家として、大きな評価を受けているベートーヴェンだが、社会から疎外され、しばしば悲しみの底にいた当時、彼の良き理解者がいたことは、彼にとって少なからず心の支えになっただろうと思う。またそれが、偉大な音楽家、「ベートーヴェン」を生んだ一つの要因となったことは間違いない。悲劇の裏で、彼と親しく交わった人々がいたことを忘れてはならない。

そして彼は、このような中で「歓喜」の讃歌を企てる。これは、彼の人生の「悲劇」に対しての挑戦で、彼が強か(したた)かに生き抜こうとしたことの証明だと思う。

「苦悩をつきぬけて歓喜へ」、まさにその通りである。彼の作曲は彼を裕福にすることはなかったが、私は彼を人生の勝利者だと思う。苦悩に闘いを挑み、そして負けることはなかったのだから。

「私は善良さ以外に卓越性のあかしを認めない。」これも、ベートーヴェンが口にした言葉である。いかにも融通の利かない、どこまでも善人な彼らしい言葉である。そのことで、周りから違った目で見られようとも、彼は自分の考え方を曲げようとはしなかった。貧困で残酷な人生に屈せず、富にも権力にも屈することなく彼は彼の道を歩んだ。

彼の人生は、一つの曲にたとえることができるかも知れない。悲しみの淵からはい上がり、幾度となく失望を重ね、そして遂に「歓喜」へ。波乱に満ちた人生、けれども彼は、その荒波に飲まれることなく、力強く人生を送り、今も彼の作曲の数々に生き続けている。

人生の勝利者とは何も、大富豪とか、一国を治める大統領とかとは限らない。富や名声、権力を手にしてもそれが果たして本当の幸せにつながるだろうか。確かに一時は自分が幸福を手にしたような錯覚に陥るだろう。

ベートーヴェンは、厳しい環境の中で、本当の自分を見い出し、そして自分の道を歩み通した。その過程で、彼の心は磨かれ、充実していった。人生をどう生きるか、目標こそ違えど、そのことを深く私に考えさせてくれた。彼が人生に注いだ情熱は、彼の残した音楽として、これからも人々を魅了してやまないだろう。

佳作

『河童』を読んで

電気工学科　三年
磯村直也

この「河童」という話を読んで一番最初に感じたことは、河童社会と人間社会とを、いろいろな面で比較して書いてある所です。また河童がかなり人間っぽく、人間と同様に、喜怒哀楽を持っていて、まるで人間社会のように書かれてました。

しかし、河童社会は、作者の理想の世界を想い描いたものかと言うと、必ずしもそうではなかったと思う。僕たち人間社会と同様に権力の差や資本家と労働者の争い、また女性が政治に進出していないという近年、日本で言われているような事も書かれてあった。では、作者は、なぜこのような河童社会を書いたのだろう。そのヒントは、次の一文にある

と僕は思います。

『河童は我々人間の真面目に思うことをおかしがる、同時に我々人間のおかしがることを真面目に思う。』

この文を読んでわかる通り、河童たちには、正義、人道とか人間社会では真面目に受け止められる言葉を聞くと腹をかかえて、大笑いしだすそうです。これより人間社会と河童社会は、考え方というか観念が全く正反対なのです。文明や主義的には、同じで、観念などが異なる。これが表している事は、おそらく晩年の作者の状態だと思う。作者である芥川龍之介は、三十五歳という若さでこの世を去っているが、「河童」を書きあげる頃には、精神的な病により自殺したらしい。だから僕は、この河童社会は、おそらく人間社会に対する批判ではないかと考えている。なぜならば、人間社会についてもっと見直し考えていけと強く迫ってくるものを感じるからである。

河童の中に用いられている技巧というか表現で、すばらしいと思ったものを挙げてみると、まず、人間の現代社会とは、異なった思想、観念を持つ河童社会を人間社会から脱落した男の体験を通しての話ということで、いわば二重の奇妙さを重ねてあり強調している。これにより、この話をいっそう奇妙な物として強めている。

人間が河童社会にまぎれ込むという、ファンタジック的でロマンあふれるような話と思っていたけど、実際は、全然違いました。ただ奇妙なだけの話かというとそうでもありません。読んでいくともっと奥の深い、作者芥川龍之介の苦悩もしくは自分に対して、また大正という時代に対しての苛立ちを感じてなりませんでした。この作品からは、作品のおもしろさより、芥川の声にならない精神の動揺が目立ちました。芥川は、なぜ自殺したのか、なぜ著名な作家達は自殺するのかは、僕にはわかりません。僕の考えられる理由は、小説を書くのに行きづまったのか、もしくは何かをさとったかわかりません。よく天才ときちがいは紙一重と言うけど芥川もそれにあたるのかもしれません。芥川の他の晩期作に「桃太郎」というものがあります。これは、世間では、正義の味方の桃太郎が、鬼ヶ島に住む悪しき鬼を退治するというのが一般の話である。しかし、作者芥川の桃太郎では、非道な桃太郎が、鬼ヶ島という楽園に住む鬼を退治するという、世間一般の桃太郎と全く逆なのである。また人間の目から見た鬼という視点ではなく、鬼の目から人間を書いてある。これにより、鬼が人間の汚さ、欲望などを言う事により、人間社会全体を風刺している。また、なぜ桃太郎の話をしたかという理由もここにあります。桃太郎同様に、河童も、河童から見た人間社会という感じで書かれています。けれども河童は、桃太郎とは異なり、前にも書いてある通り、世間や人間の風刺というわけではありません。

河童という作品は、作者芥川のつかみどころのないものを感じ、感慨深いものを感じます。一つ納得できない事は、芥川がなぜ死んだかという事です。僕に言わせると、芥川は、死に逃げたとしか考えようがありません。生きていれば、間違いなくすばらしい作品がまだまだ読めたはずだから。芥川龍之介というすばらしい作家の作品を、できることならもっともっと読みたかったと思ってなりません。

佳作

『十二番目の天使』を読んで

制御情報工学科三年　安部　麻衣子

どうしようもなく悲しい気持ちから救ってくれるものは、時に、とてもささいな事だったりする。

幸せの絶頂とでも呼べるような場所にいた主人公は、事故で、最愛の妻と息子をいっぺんに失くし、絶望のどん底へと一気に転落し、それ以上生きていくことに、何の意味も持てなくなってしまう。

絶望しきった心の中の痛みに耐えられなくなったある日、ついに自殺しようとまで思いつめていた主人公を救ったのは、恐ろしく野球の下手な、まだたった十一歳の小さな少年、ティモシーだった。

幼い頃からの親友のたっての頼みで、リトルリーグのチームのひとつ、エンジェルズの監督を引き受けることになった主人公は、やがてチームの名前そのものの存在になる十二人の天使たち、つまり、選手たちと出会う。

そして、自分自身も子供の頃から親しんできた野球を通して子供たちと接していくうちに、家族を失ってから閉ざしていた気持ちをひらき、もう一度、周りの世界と関わって生きていく事を決意する。

チームの全員が主人公の生きる理由となったわけだが、その中でも特別な存在になったのは、やはりティモシーなんだと思う。

ティモシーは、最後の最後まで所属するチームが決まらなかったくらいに野球が下手で、そういう子は間違いなくすぐにチームから抜けていくのが普通だった。自分の能力をそれ以上人目にさらすのが嫌だから。

けれど、ティモシーは違った。毎試合、必ず出てきて、どんな時にもせいいっぱい自分に出来る事をする。プレーは上手く出来なくても、誰よりもチームメイトに大きな声援を送る。

ティモシーのお気に入りのフレーズ、

「毎日、毎日、あらゆる面で僕はどんどん良くなってる!」

「絶対、絶対、あきらめない!」

このふたつはいつしか、チームの全員に、そして観客たちにまで伝染していく。

周囲の人間の心をこんなにも捕らえているのだ。エンジェルズの十二人目のメンバーで、主人公の「十二番目の天使」になったこの男の子は。

現実を受け入れる事は、時々とても難しくなる。

元気な時には気付かないけれど、実はいつもすぐそばで口を開けている絶望に、落ちそうになる時がある。

そんな気持ちの時には、とてもじゃないけど自分の心を前向きに保って、希望を持って生きることなんて出来ない。

いつも、誰もが当たり前に行なってる、朝になったら目を覚まして起き上がる事にすら、理由が必要になる時がある。

悲しさに負けて、このまま自分が枯れ木のようになってしまうような気がしてくる。自分自身を支える強さすら見失っている。

けれど、そんな時に偶然出会う人、物事が自分を救ってくれる事が、時々ある。

目をそらしていた険しい現実を受け止めて、立ち向かっていく勇気を与えてくれる誰かや、何かが、何の前触れもなく現れたりする。まるで、本当の天使みたいに。

すると、悲しい気持ちを増長させるだけだった思い出が、これからまた生きていく上での何よりの支えに変わる。大丈夫だと言える自信が生まれる。

ティモシーの勇気と、どんな時でも前向きな精神は、一日一日を自分らしく、せいいっぱい生きていくことを教えてくれたし、グラウンド上の彼は、諦める事さえしなければ、もしかしたら様々な奇跡が起こるかもしれないことの証明だった。

ティモシーから、いろんな事を学んだのは主人公だけではない。

悲しい事なんてまだたくさん転がっている。けれど、そこから私を救ってくれる存在も負けないくらいにたくさんあるのだ。きっと。

あの小さな男の子は、絶対にあきらめない心だけでなく、出会いの大切さも教えてくれたのだと思う。

佳作

『よその子』を読んで

土木工学科 三年 大野道秀

私はこの本を学校の図書館で見つけた。本は年に五冊程読めばよい方だ。だからというのは何だが自分は本当に読みたいと思った本しか読まない。実際にこの『よその子』という本を見つけた時、真剣にこの本を読んでみたいと思った。パッと見た時に学習障害児について書かれている事を知り、大いに関心をもった。

この本に登場してくる学習障害児は四人である。七歳の自閉症の男の子ブーは気をつけ

のまま固まっていて何を話しても反応しないが、おうむ返しに言うだけ、かと思えば奇声を発して駆けまわっている。七歳の読字障害の少女ロリは、幼い頃の虐待のせいで脳に傷があり、字がまったく区別できない事を恥ずかしがっている。十歳の粗暴な少年トマソは、父と兄を継母に射殺されて憎しみのとりことなっていた。十二歳のおとなしい少女クローディアは無知な行動がもとで妊娠していて、うつ状態だった。そして、この苛酷な運命から彼らを救いだそうと全精力を傾けている先生のトリイがいた。

　しかしこのような子だからこそはっきり見えてくる個々の個性などがあった。ブーは一般の人にはない妖精のような愛らしさを持ち、ロリは元気を人に与えてくれるような不思議な力を持ち、トマソは心の強さを持ち、クローディアは頭は良く考え方も大人に近いものを持っていた。本を読んでいくうちに、このような子達の強さや心のある部分の弱さを私に感じさせてくれた。ロリは、周りの人達を明るくする事ができるが、字というものを全く認識できない。普通の生徒なら、登校拒否を起こしてしまうだろう。もし私が彼女のように字が認識できなかったら、学校には通う事ができないだろう。それは勇気がないからである。人にいじめられるとかではなく、自分のできない事に腹が立ってではあるが、彼女のようにできない事を辛抱強くするという根気というものが足りないからである。彼女の前の先生は、この読める段階にはない彼女に無理を強いていた。しかしトリイは、彼女に無理を強いるのではなく、長所を伸ばそうと努力をしていた。この立場でこの二つのどちらかを人は選択するであろう。私は、もしどのような状況でも後者を選択したいと思う。それは人を育てるには、長所から伸ばすといいと自分は思っているからである。ブーは自閉症であり、読んでいる限りでは、大きな赤ちゃんだなあと感じた。トイレ一つ教えるにしても我慢強く何回も何回も、しつける事が大切だろうと感じとれた。トリイは彼に無理強いはさせず、とりあえず彼がその事に興味を持つまで待つ。それが自閉症の子に教えるという事なんだろうと思った。トマソに関していうと、時に暴力などを振るうというだけで普通の少年であった。しかし本の中からでも小さい時に受けた衝撃の強さを感じ取れた。それがトラウマとなって起きた彼の行動に読んでいる私にまで恐れを感じる。それと闘う事が彼のこれからの自分の成長への闘いなのだと思った。クローディアは十二歳で妊娠した事を除けばごく普通の少女である。最後には彼女は赤ちゃんを養女に出すのだが、そこに至るまでの子供でもその中にある母の強さというものを感じとれた。人はここまで大人になれるんだと学んだ。

　学習障害児のクラス、それは普通のクラスでは学べない。いやその子達は学ぶ事はできるが先生達にその能力がないために教室を変わるのを止むをえなくなった子達だと思った。その子達は、その現実と向き合いそれを乗り越える事のできる子達だった。しかし、まだそれに対応しきれる心の分かる人間が少ないだけだ。よく言うではないか、神は乗り越える事のできるものにしか、その試練を与えないと……。この子達はそれができる子なんだと感じた。

　この「よその子」という題は他の人は自分には関係のない人として扱うがトリイは違った。彼女は、時には親の立場から子供達を見て、本当に心配し、成長を願っていた。その時子達は感じたのだろう。自分達は彼女にとっては「よその子」ではないんだなあという事を。

　トリイ・ヘイデンはこの本を通して、学習障害児も普通の子も学ぶ権利があり、私達の中にはその場を作るために力をつくす者がいるいうことを知ってもらう事と、どのような障害があろうともその子のせいではなく、どんな障害児も普通の子だという事を語ろうとしている。私は、人は何事に関しても平等だと思うし、人との接し方を考えていくべきであろう。

編集後記

学生図書委員長
（制御情報工学科　五年）
渡辺純子

夏休みの宿題。「どれか一つしなくてもいい」と言われたら、私の場合、迷うことなく読書感想文を選ぶ。感想文を書きたくなるような本にたどり着けないからだ。

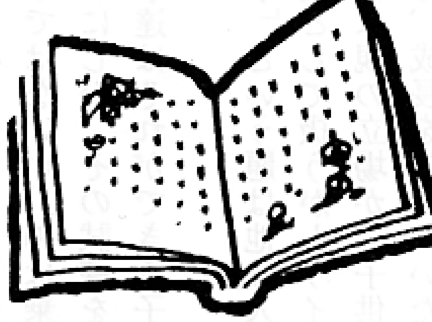
大体私にとっての本の感想なんて、面白いか面白くないか、この二つだけ。ベストセラーだって、面白くないと思ったら、私にとっては駄作なのである。しかし、「面白くなかった」と書いてはいけないのだ。読書感想文とは何と矛盾しているのであろう。

――と、私の主張はともかく、今回の読書感想文コンクールである。世襲制（九割方事実）の図書委員長とやらになってしまったので、最初で最後の読書感想文の審査というものを体験した。書くのは嫌いだけど読むのは苦にならないタイプの人間なのだが、それに点数をつけるとなると、これがまた大変な作業。「いい事書いてる！」と思ったのに、誤字・脱字、平仮名ばかりの文で、せっかくの感想文が台無しになってしまっている作品が多かった。そういう作品にもそれなりの採点をしたと思っているが、読書感想文は人に読まれることが前提で書くもの。面倒だと思っても辞書で調べて、正しい漢字と送り仮名を使うのが礼儀というものですよ。

まあ何にしろ、自分以外の人達の本に対する感想や内容のとらえ方を聞く（この場合は読むだが）のは本当に楽しい。今回の候補作品の中には、私も読んだことがある本についての感想文が多くて、同じような意見でも細かい所で微妙に違っていたり、自分が全然思いもしなかった点についての意見を読んで、逆に考えさせられたりした。未読の本についても、予備知識がないなりに楽しませてもらったし、その本を読んでみたいと思った作品も何点かあった。

自分の思ったことを言葉で伝えるのはなかなか難しい。それを話し言葉ではない文章にするとなれば、さらに難しくなる。文章表現力は一種の才能だとは思うが、経験を積めば少なからず上達するものでもある。読書感想文は文章表現力はもちろんのこと、読解力や漢字の知識も必要だ。国語的な能力を身に付けるにはもってこいの課題なのかもしれない。

――でも、嫌いなんだよなぁ…。



「もさく　第二十九号」

発行日　平成十四年一月二十一日

発行者　大分市牧一六六六番地
大分工業高等専門学校
学生図書委員会
教官図書委員会

印刷所　(株)エポックアート
住　所　大分市羽田九八四―一
電　話　〇九七―五六九―一一八一